

論語のススメ(1)

NPO法人 論語普及会

〒531-0071 大阪市北区中津7丁目5番21号
アイオイ第一ビル303号室
TEL.06-4797-9570
FAX.06-4797-9571

①人と社会のみちしるべ……論語とは

論語は、今から約2500年前に中国で書きました。

論語をあまり知らない人からすると、孔子が書いた本というイメージの人もいるかもしれませんが。実は、論語は弟子達がまとめた語録なのです。

孔子(紀元前551〜479年、春秋時代末期の思想家・教育者・政治家)が亡くなった後、孔子と優れた弟子達が言ったこと、行ったことを書き記しました。孔子、直弟子、孫弟子達は、それぞれが生き方、政治や国の在り方などを様々に問答していました。その中で、孔子から直接学んだ言葉の記憶を弟子達が思い起こし、皆で議論して編集したのです。

孔子の教えを絶やさぬように、という思いが『論語』となり、後世にまで引き継がれてきたのです。

『あなたに伝えたい、はじめての論語』

②絶えず努力し、学び続けた人……孔子とは

孔子は、紀元前551年春秋時代末期の魯という国に生まれ、紀元前479年、73歳で亡くなりました。孔子は、もとは低い身分の出身で、父を早くに亡くし、貧しい母子家庭の中で育ちました。そんな中、幼い頃から、自ら勉学に励み、下働きもいっぱいして役人となりました。出世した時もあるれば、うまくいかず辞職せざるを得ない時もあり、浮き沈みの激しい人生ではありました。ですが、当時の政治を改革したいという志を常に持ち、挑戦を続けた人です。

生まれた身分や能力などは関係ない、努力と経験の積み重ねによって人は開花する。そうだったことを体現していた人なのです。

『孔子も人生の壁にぶつかりながら生きていた一人』

③読みやすい『仮名論語』

……漢文を親しみやすく編集

学而篇から郷党篇までを「上論」、先進篇から堯曰篇までを「下論」と呼びます。篇の名称はいずれも各篇の初めの二文字をとったものです。例えば、学而第一の始まりは漢文で書くと、「子曰、学而時習之、不亦説呼。」と書きます。その、最初の「学」と「而」をとって「学而」です。論語は中国でできた言行録ですので、原文は漢文です。漢文のまま

だと日本人には読みにくいいため、漢文の漢字にひらがなを足した「書き下し文(読み下し文ともいいます)」が考えられました。しかし、元々の漢字の読み方が分からない場合、音読に困りますので、さらに日本人向けの書き下し文が作成されました。伊與田覺先生は、誰でも親しめるように、そして気楽に、子どもも読めるようにと全文を書き下し、全漢字に読み仮名を附けた『仮名論語』(上段には訳文)を作成したのです。

『家族で読みたいくなる論語をめがけて』

④成功者のバイブル……

論語を愛し、活用した偉人達

孔子の教えは、道徳的振る舞い、働く心得、人間関係や家族関係を良きものにするなど、日常生活のあらゆる場面で役立つエッセンスが豊富です。孔子の教えは多くの社会人・経営者らに好まれ、社会の発展や、ビジネスの場面でも大きな影響を与えてきました。論語をもとにしたビジネスマン向けの解説本・実用書なども多くあります。

新一万円札の顔となった「近代日本経済の父」渋沢栄一も論語を愛した一人です。彼が著した『論語と算盤』は非常に有名です。彼は論語でいう「君子」を「紳士」ととらえ直し、自らの生き方と当時の日本を成長させるうえでのバイブルとしていました。論語から生き方、人と社会の導き方を学び、己を支える拠り所とし、明治維新後の日本経済と、500もの企業の発展に尽力しました。

京セラ(株)の創業者・稲盛和夫もまた、古典や論語を愛した一人です。事業の成功と失敗は、経営者が持つ志や人間力が大いに左右すると彼は考えました。その志や人間力を高めるために、古典や論語から大いに学べと語ったのです。

経営で大きく成功した人の多くが、論語を読み尽くし、自らを磨きながら、事業や社会を活性化させていったのです。

『先人に学べ。生き活きと生きるための術』



学而第一
子曰わく、学びて時に之を習う亦説はしからずや。朋遠方より来る有り亦樂しからずや。人知らずして愠みず亦君子ならずや。
有子曰わく、其の人と爲りや孝弟にして上を犯すを好む者は鮮なし。上を犯

一

すを好まずして亂を作すを好む者は未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む本立ちて道生ず。孝弟なる者は其れ仁を爲すの本か。

子曰わく、巧言令色鮮なし仁。
曾子曰わく、吾日に吾が身を三省す。人の爲に謀りて忠ならざるか、朋友と交

二

りて信ならざるか、習わざるを傳うるか。
子曰わく、千乗の國を道くに、事を敬し
て信用を節して人を愛し、民を使りに時
を以てす。
子曰わく、弟子入りては、則ち孝出でて
は、則ち弟、謹みて信、汎く衆を愛して、仁に
親しみ行いて、餘力あれば、則ち以て文を

三

學べ。
子夏曰わく、賢を賢として、色に易え、父
母に事えて能く、其の力を竭し、君に事え
て能く、其の身を致し、朋友と交るに言
て信あらば、未だ學ばずと曰うと、雖も吾
は必ず之を學びたりと謂わん。
子曰わく、君子重からざれば、則ち威あ

四

らず。學べば、則ち固ならず。忠信を主
とし、己に如かざる者を友とすること無
かれ。過ては、則ち改むるに憚ること勿
かれ。
曾子曰わく、終を慎み、遠きを追えば、民
の徳厚きに歸す。
子禽、子貢に問うて曰わく、夫子の是の

五

邦に至るや、必ず其の政を聞く、之を求め
たるか、抑、之を與えたるか。子貢曰わ
く、夫子は温良恭儉讓、以て之を得たり。
夫子の之を求むるは、其れ諸れ人の之を
求むるに異なるか。
子曰わく、父在せば、其の志を觀、父没す
れば、其の行を觀る。三年、父の道を改む

六

る無くんば、孝と謂う可し。
有子曰わく、禮の和を用て、貴しと爲す
は、先王の道も斯を美と爲す。小大之に
由れば、行われざる所あり。和を知りて
和すれども、禮を以て之を節せざれば、亦
行うべからざるなり。
有子曰わく、信義に近ければ、言復むべ

七

きなり。恭禮に近ければ、恥辱に遠ざか
る。因ること、其の親を失わざれば、亦宗
とすべきなり。
子曰わく、君子は、食飽くを求むること
無く、居安きを求むること無し。事に敏
にして、言に慎み、有道に就きて正す。學
を好むと謂うべきのみ。

八

子貢曰わく、貪しくして、詔うこと無く、
富みて驕ること、無きは何如。子曰わく、
可なり。未だ貪しくして、道を樂しみ、富
みて、禮を好む者には、若かざるなり。子
貢曰わく、詩に云う、切するが如く、磋する
が如く、琢するが如く、磨するが如しと。
其れ斯を之れ謂うか。子曰わく、賜や、始

九

めて、與に詩を言うべきのみ。諸に往を
告げて來を知る者なり。
子曰わく、人の己を知らざるを患えず、
人を知らざるを患うるなり。

十